

藪の中

芥川龍之介



検非違使けびいしに問われたる木樵きこりの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違ちがいございませぬ。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処でございますか？ それは山科やましなの駅路えきぢからは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に瘦やせ杉の交まじつた、人氣ひとけのない所でございます。

死骸しかいは縹はなだの水干すいかんに、都風みやこふうのさび烏帽子かぶつたをかぶつたまま、仰向あおむけに倒れて居りました。何しろ一刀ひとかたなとは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りませぬ。傷口も乾かわいて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅うまばえ

が一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかつたか？ いえ、何もございませぬ。ただその側の杉の根がたに、縄なわが一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございませぬ。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬かまなぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路かよとは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師たびほうしの物語

あの死骸の男には、確かに昨日きのう遇あつて居ります。昨日の、——
さあ、午頃ひるごろでございましょう。場所は関山せきやまから山科やましなへ、参ろう
と云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、
関山の方へ歩いて参りました。女は牟子むしを垂れて居りましたか
ら、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重はぎがさねらし
い、衣きぬの色ばかりでございます。馬は月毛つきげの、——確か法師ほうしがみ髪
の馬のようでございました。丈たけでございますか？ 丈は四寸よきも
ございましたか？ ——何しろ沙門しゃもんの事でございますから、そ
の辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀たちも帯びて居お
れば、弓矢たずさも携たずさえて居りました。殊に黒い塗りぬり籠えびらへ、二十あま
り征矢そやをさしたのは、ただ今でもはつきり覚えて居ります。
あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、

真まことに人間の命なぞは、如露にょろやく亦如電にょでんに違いございませぬ。やれやれ、何とも申しようのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問われたる放免ほうめんの物語

わたしが搦からめ取つた男でございませうか？　これは確かに多襄丸たじようまると云う、名高い盗人ぬすびとでございませう。もつともわたしが搦からめ取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口あわだぐちの石橋いしばしの上に、うんうん呻うなつて居りました。時刻でございませうか？　時刻は昨夜さくやの初更しよこう頃でございませう。いつぞやわたしが捉とらえ損じた時にも、やはりこの紺こんの水干すいかんに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居りました。ただ今はそのほかにも御覽の通り、弓矢の類たずささえ携たずさえて居りませう。さようでございませうか？　あの死骸の男が持つていたのも、

——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございません。革かわを巻いた弓、黒塗りの籠えびら、鷹たかの羽の征矢そやが十七本、——これは皆、あの男が持つていたものでございましょう。はい。馬もおつしやる通り、法師ほうし髪がみの月毛つきげでございませぬ。その畜生ちくしやうに落されるとは、何かの因縁いんねんに違いございませぬ。それは石橋の少し先に、長い端綱はづなを引いたまま、路あおすずきばたの青芒あおすずきを食つて居りました。

この多襄丸たじやうまると云うやつは、洛中らくちゆうに徘徊する盗人の中なかでも、女好めこのきのやつでございませぬ。昨年こつねんの秋鳥部寺あきとりべでらの賓頭びんずる盧うしろの後の山やまに、物詣ものもでに來たららしい女房にようばうが一人、女めの童わらわと一しよに殺されていたのは、こいつの仕業しわざだとか申して居りました。その月毛に乗つていた女も、こいつがああの男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりませぬ。差出さしだがましゆうございませぬが、それも御詮議ごせんぎ

下さいまし。

検非違使に問われたる媼おうなの物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附かたづいた男でございます。が、都のものではございませぬ。若狭わかさの国府こくふの侍でございます。名は金沢かなざわの武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい気立きだてでございますから、遺恨いこんなぞ受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさざ、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気かちきの女でございますが、ただ一度も武弘のほかには、男を持った事はございませぬ。顔は色の浅黒い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりざねがでございませぬ。

武弘は昨日きのう娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうになりましたやら、婿むこの事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥うばが一生のお願いでございいますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじようまるとか何とか申す、盗人ぬすびとのやつでございいます。婿ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

多襄丸たじようまるの白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行つたのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されずまい。その上わたしもこうなれば、卑怯ひきょうな隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあるたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えただのです。わたしはその咄嗟とつさの間あいだに、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した

事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りつぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになる

と、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あはいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うずめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時はんときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲かに渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまっ

たのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりま
した。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町ほど行つた処に、
やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、
これほど都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分け
ながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつき
ました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見
える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らにな
ると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早い
か、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩はいているだ
けに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまり
ません。たちまち一本の杉の根がたへ、括くりつけられてしま
いました。縄なわですか？ 縄は盗人ぬすびとの有難さに、いつ扉を越えるか

わかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を
出させないためにも、竹の落葉を頬張らせれば、ほかに面倒は
ありません。

わたしは男を片附けてしまつと、今度はまた女の所へ、男が急
病を起したららしいから、見に来てくれと云いに行きました。こ
れも凶星ずぼしに当つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は
いちめがさいちめがさ市女笠を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へは
いつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しば
られている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから
出していたか、きらりと小刀さすを引き抜きました。わたしはまだ
今までに、あのくらい気性の烈はげしい女は、一人も見ただ事があり
ません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突
かれたでしょう。いや、それは身を躲かわしたところが、無二無三むにむざん

に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸たじょうまるですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすを打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、———そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違いのように縫すりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥はじを見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしる、生き残った男につれ添いたい、———そうも喘あえぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣に

なりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなたの方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなたの方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。
わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉
の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男
は血相けっそうを変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口
も利きかずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀
打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わた
しの太刀は二十三合目ごうめに、相手の胸を貫きました。二十三合目
に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事
だけは、感心だと思つて居るのです。わたしと二十合斬り結ん
だものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）
わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、
女の方を振り返りました。すると、———どうです、あの女はど
こにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げ

たか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路やまみちへ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後ごの事は申し上げるだけ、無用の口数くちかずに過ぎますまい。ただ、都みやこへはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗おうちの梢こずえに、懸ける首と思っすから、どうか極刑ごくけいに遇わせて下さい。(昂然こうぜんたる態度)

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺こんの水干すいかんを着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶みもだえをしても、体中からだじゅうにかかった縄目なわめは、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ころぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とつさの間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端とたんです。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚さとりました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震みふるいが出ずにはいられません。口さえ一言いちげんも利きけない夫は、その刹那せつなの眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに

閃ひらめいていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑さげすんだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺こんの水干すいかんの男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛しばられていただけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑さげすみの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中うちは、何と云えば好よいかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られ

ません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥はじを御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫いまとは忌いわしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀たちを探しました。が、あの盗人ぬすびとに奪われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀さすがだけは、わたしの足もとに落ちていのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」
夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇くちびるを動かしました。勿論口

には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹はなだの水干の胸へ、ずぶりと小刀さすがを刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしよう。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交まじった杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を呑みながら、死骸しがいの縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀さすがを喉のどに突き立てたり、山の裾

の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢にはなりませんまい。(寂しき微笑) わたしのように腑甲斐ないものは、大慈大悲の観世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——(突然烈しき歔歔)

みこ
巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根しばに縛られている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせを

した。この男の云う事を真まに受けるな、何を云つても嘘うそと思え、
——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は悄然しやうぜんと
笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやつてゐる。それがど
うも盗人の言葉に、聞き入つてゐるように見えるではないか？
おれは妬ねたましさに身悶みもだえをした。が、盗人はそれからそれへと、
巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫と
の仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の
妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それ
た真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う
話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれは
まだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい
妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ お

れは中有ちゆううに迷つていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚しんいに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色がんしよくを失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂つたように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様さかさまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪のろわしい言葉が、人間の耳に触れた事がある

ろうか？ 一度でもこのくらい、——（突然ほとぼし迸るごとき嘲笑ちようしよう）

その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたおされた、（再びふたたび迸るごとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領うなずけば好い。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫ぶが早いか、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟とっさに飛びかかったが、これは袖そでさえ捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景

色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切った。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟いたのを覚えていゝる。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がある。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなる。と、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさ

だろう。この山陰やまかげの藪やぶの空には、小鳥一羽さえず嘯りに来ない。ただ杉や竹の杪うらに、寂しい日影ひかげが漂ただよっている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇うすやみが立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸むねの小刀さすがを抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮あふが溢あふれて来る。おれはそれぎり永久に、中ちゆう有ゆうの闇へ沈んでしまった。……

(大正十年十二月)

藪の中

藪の中

底本：「芥川龍之介全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 1 月 27 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 7 月 15 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

※底本の中見出しは、ゴシック体で組まれています。

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 11 月 10 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。